戸隠神社 あをがき 青垣

令和２年［春夏号］
戸隠神社発行
〒381-4101
長野県長野市戸隠3506
026-254-2001
http://togakushi-jinja.jp

中社大鳥居の建て替え

いま、ＳＮＳの投稿などのため、中社大鳥居と三本杉を背景に「〇〇映え」スポットとして、写真撮影をする多くの崇敬者や観光客の方々をお見受けします。

この鳥居は、長野県史跡を構成する重要な建造物で、また当地区が指定されている、国の重要伝統的建造物群の中でも環境物件として登録されており、戸隠神社の象徴として多くの皆様に知られております。

この大鳥居の歴史を紐解けば、江戸時代の古絵図や、松代藩伝来の「戸隠山祭礼図巻」に、朱塗りの「明神鳥居」として鮮やかに描かれており、神仏混交の時代から、多くの参詣者を迎え入れていたことが判ります。

現在の大鳥居は昭和十二年に建立されました。八十有余年という歳月、戸隠の厳しい風雪に耐えて参りましたが、この度、調査を行ったところ、笠木や柱に劣化が目立ち、倒壊が危惧されることが判明しました。

そこで、令和三年四月に斎行される〈令和初の式年大祭記念事業〉として、建て替えることとなりました。

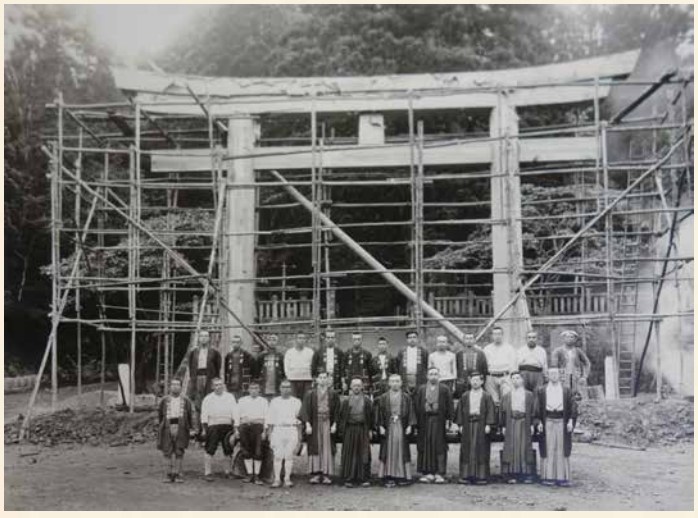
工期は、令和二年春から半年間で、現在の大鳥居の形状・寸法に倣い建立する予定です。

工事期間中、現場（中社広庭）に仮設の作業所を設置し、巨大な材木の加工の様子をご覧いただいたり、まだ日程は決定していませんが、「鉋掛け」の体験をしていただくことができるよう検討しています。

令和三年の春に斎行される「式年大祭」は、新しい大鳥居がご参拝の皆様をお迎えするでしょう。

また、この事業に当たりましては、全国の戸隠講の皆様を始め、多くの皆様より幅広くご寄付を賜れば幸甚に存じます。

詳細については、神社社務所並びに各聚長にお問い合わせいただきますようお願い申し上げます。



昭和12年　建立当時の様子

※あをがき（青垣）とは切り立った険しい山が垣根のように連なる様子。当社では祝詞の中で「青垣成す戸隠山の麓に鎮まり坐す戸隠神社」と用います。

シリーズ 御祭神考

光を取り戻した天手力雄神（あまのたぢからおのかみ）

徳橋　達典

渋い朱塗りの随神門が木立のなかで異彩を放つ。茅葺の屋根は苔生し、草々も思い思いに芽を伸ばす。戸隠神社奥社は厄介者であるはずの屋根に茂った八千草さえも、その彩として見守っている。

参道を行く数多の人を圧倒させるのは、樹齢約四百年の杉並木であろう。林立する幹に張られた注連縄（しめなわ）は枯淡の趣を深め、微かに風になびく。彫りの深い木肌の蔭はセピア色に刻まれて、杉の葉と苔の緑と調和を結ぶ。樹々の隙間を突き抜けて、霞を散らす陽光は、天手力雄神に手を引かれ、天の岩戸から再来する天照大神の輝きを思い起こさせる。

程なく進むと堅牢な石垣に囲われた拝殿が見えてくる。この戸隠神社の奥宮に天手力雄神は祀られている。社殿の背後に迫り立つギザギザとした稜線は北信五岳の一つ戸隠山である。実はこの山は天手力雄神が高天原から投げ下した天の岩戸とされている。

奥社参道　著者撮影

この神話によれば、天照大神は素戔嗚尊（すさのおのみこと）の乱暴狼藉に怒り哀しみ、天岩窟（あまのいわや）に隠れ籠ってしまう。これにより、世界は光を失い常闇（とこやみ）となる。困惑した八百万の神々は思兼神（おもいかねのかみ）を中心に協議を重ね、先ずは長鳴鳥を集め、天手力雄神を岩戸の脇に立たせる。次に天児屋命（あまのこやねのみこと）と太玉命（ふとたまのみこと）は真榊（まさかき）を立てて祈祷する。そして、天鈿女命（あめのうずめのみこと）は激しく舞い踊り、神々の笑いを誘い、この場を大いに盛り上げた。

楽し気な場の雰囲気が気になって、天照大神が外の様子を窺おうと少し岩戸を開いたとき、天手力雄神が天照大神の手を取って、外へと連れ出す。多少荒療治ではあったが、天手力雄神はじめ神々のはたらきにより、世界は光を取り戻すことができたのである。

天照大神の御手を取り、岩戸からお迎えする天手力雄神（個人蔵）

『日本書紀』第七段第二の一書によれば、このときに鏡についた小さな瑕（きず）は、伊勢の神宮で祀られている八咫鏡（やたのかがみ）に残されている。その神宮の内宮正殿に鎮座するのが天照大神である。ただし、この正殿は〝複数の神々が相並びます〟相殿（あいどの）と呼ばれ、鏡をご神体とする天照大神を中心に、東側に弓をご神体とする天手力雄神、西側に剣をご神体とする栲幡千千姫命（たくはたちぢひめのみこと）が祀られている。

栲幡千千姫命は天照大神の御子天忍穂耳尊（あまのおしほみみのみこと）の妻である。つまり、天照大神にとって、身近で仕えてほしいお嫁さんなのである。一方、天手力雄神は信頼できる最強のガーディアンである。それと同時に、文献上、天照大神に唯一触れたことがある神ともいわれている。世界に光を取り戻した天手力雄神の力は天照大神から相殿の神として認められるほど深い信頼を得ていた。戸隠神社奥社に祀られる天手力雄神とは神宮内宮の正殿に祀られる神でもあるのだ。

とくはし　たつのり氏プロフィール

1964年、東京都生まれ。國學院大學大学院文学研究科博士課程修了。博士（神道学・國學院大學）。共同通信社ビジュアル報道局写真部次長を経て、現在、今尾神社禰宜・國學院大學兼任講師。著書・論文ー『吉川神道思想の研究　吉川惟足の神代巻解釈をめぐって』（ぺりかん社）、『日本書紀の祈り　多様性と寛容』（ぺりかん社）、『日本書紀の系譜　いのちとつながり』（ぺりかん社）など

シリーズ 御祭神考 エピソード❷

天手力雄神は戸隠神社奥社のみならず、多くの神社で御祭神として祀られている。三重県多気町の佐那神社（さなじんじゃ）は『古事記』にも「手力男神は佐那県（さなのあがた）に坐せり」と明記された古社であり、正殿に天手力雄神を祀る伊勢の神宮（内宮）とも結びつきが強い。岐阜県岐阜市に鎮座する手力雄神社も貞観二（八六〇）年に、宮中から天手力雄神を勧請したとされる。

徳橋　達典

一方、岐阜県各務原市（かかみがはらし）に鎮座する手力雄神社は、戸隠神社奥社や戸隠の地主神とされる九頭龍大神の影響が窺える。延宝二（一六七四）年創建の本殿には、軒の柱に巻きつく一対の龍（各務原市の重要文化財）が彫刻されている。この龍が水神あるいは雨乞いの神として田畑に恵みを与え、各務原台地の西角から木曽川北岸に睨みを利かせてきたのである。

ある巻談（こうだん）によれば、源頼朝以来、時の天下人たちは必ず何れかの九頭龍神社に詣でた。しかし、織田信長だけはしなかった。それ故、信長は天下布武をなし得なかったという。

信長は、永禄十（一五六七）年、手力雄神社で稲葉山城（岐阜城）攻略の戦勝祈願を行い、見事に心願を成就している。はたして巻談のとおりであれば、信長が詣でた当時の手力雄神社本殿には九頭龍大神が彫られておらず、ついに九頭龍大神に頭を垂れることがなかったのか。ロマンを掻（か）き立てられるところである。

各務原市・手力雄神社（てぢからおじんじゃ）

「あをがき」バックナンバーは当神社ホームページからも閲覧が可能です。